

# なぜ、現代音楽がきらいなのですか？

## 新ウィーン楽派の音楽について

名古屋フィルハーモニーの演奏会のプログラムに載せたものです。

### なぜ、あなたは、現代音楽がきらいなのですか？

だって、まず、音が汚くてヒステリックだから。  
それに、音楽が余りにも断片的すぎてまとまらず、なにが言いたいのか良く分からないから。  
でも、「現代音楽はきらい」などと正直に言ったら、「現実を知らぬ老いた頑固者で、アクチュアルな判断能力に欠ける」なんて思われるみたいで、音楽ファンにとってはいまだに一種の踏絵的存在ね。  
それに一番いやなのは、音楽そのものがとても邪悪な感じがするから。  
だから、現代音楽は好きになれない。

おや、まあ、現代音楽もたいそう嫌われたものですね。なるほど、うるさくて、汚くてまとまりがなく、スノップで邪悪なものはだれでもきらいです。でも、現代音楽は、本当にそんなにいやな奴なのでしょうか？ 今夜のウェーベルンの作品を聴きながら、ひよっとしたら仲の良い友だちになれるかもしれない新しい友のことを考えて見ましょう。

### 現代音楽は二つあります

「現代音楽」とは、例えば、英語の“contemporary music”のことです。すなわち、「同時代の音楽」のことなのです。簡単に 20 世紀の音楽といいでしょう。この 20 世紀を前半(世紀初頭から两大戦間を含む期間)と後半(1945 年＝第2次世界大戦以後)に分けて見ますと、音楽では、前半は「1 2 音音楽」の時代、後半は「前衛音楽」の時代に分けられましょうか。

「1 2 音の理論」で書かれたウェーベルンの音楽は、今の私たちにとっては半世紀も前の古い音楽で、現代音楽の古典といいでしょう。ジョン・ケージの前衛音楽とは全く別のものですので、今夕(こんせき)は、「1 2 音音楽」のことだけにしておきたいと思います。

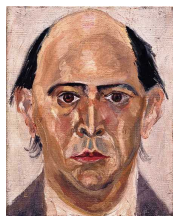
### 三羽の鳥

ご存知のように「1 2 音音楽の理論」はシェーンベルクによって「発明」されました。彼が 1 2 音の理論をついに完成したとき(1921 年)、散歩の途中で、弟子のルーファーに次のように言いました、「今日私はちょっとした発見

をしたけれど、これで今後百年間のドイツ音楽の優位が保証できると思うね」。この話を紹介したあとで音楽学者で作曲家の柴田南雄さんは「およそシェーンベルクの発言の中で、これは最もユダヤ的なものの一つであろう」と補足しています。

シェーンベルクは、「私はこの方法を『相互の間でのみ関連のある12の音による作曲法』と呼ぶ」といった言い方で「12音音楽宣言」をしています。この「12音音楽」が市民権を得たのは、シェーンベルク個人の発想や思いつきだけではなく、「新ウィーン楽派」こぞっての音楽運動に発展したからです。

その「新ウィーン楽派」とは、シェーンベルク（1874-1951）とアントン・ウェーベルン（1883-1945）とアルバン・ベルク（1885-1935）の「ウィーン三羽鳥」を中心とした音楽家グループのことを言います。



Arnold Schönberg



Alban Berg



Anton Webern

「ウィーン古典派の三羽鳥（ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン）」の栄光を受継ぐ名称であることは直ぐお分りでしょう。特に、「新ウィーン三羽鳥」は、三人ともウィーン生まれのウィーン育ちですので、文字通りウィーン人ばかりです。むろん、その中心は最年長のシェーンベルクです。彼は作曲の師であるだけではなく、精神的な父親役をも務めていました。まるで教祖のごとく、弟子たちの崇拜を一身に集めていました。彼の強烈な個性と徹底した教授法は、才能ある弟子たちをたくましく育てていきました。それは、ルネッサンスの芸術工房のような雰囲気でした。（未だ、12音技法は完成されていませんでしたが）新しい理想を抱く親方を中心に、その人柄と信念に共鳴した若者たちが自由に創作にふける、といった趣（おもむき）が強く感じられます。

### 最初からきられた「現代音楽」

しかし、意外にも、彼らの音楽活動は、スキャンダルによって始まります。1913年は、音楽史上有名なスキャンダルの年です。3月にウィーンで、シェーンベルク一派の演奏会が激しい大乱闘の舞台になり、5月にはパリのシャンゼリゼー座で、ストラビンスキーの「春の祭典」の初演がまたつかみあいの大喧嘩になったことは良くご存知の通りです。

さて、まず、ウィーンの事件ですが、これは『文学・音楽アカデミー協会』の主催でなされたもので、言ってみればシェーンベルク楽派の御目見得興行でした。三羽鳥の作品を中心にして、最後にマーラーの曲が演奏されるにこ

とになっていました。なぜなら、この演奏会が2年前に亡くなったマーラーの追悼演奏会であったからです。しかし、このマーラーの曲はついに演奏されずじまいでした。

先ず、最初のウェーベルンの「管弦楽曲のための六つの小品」（大編成版）から口笛と嘲笑とやじで大変な騒ぎになり、それが次第に局地的な小競合いに広がり、会場中が険悪な状態になってきたかと思うと、4番目のベルクの曲の時には殴りあいの喧嘩が始まりました。警官が中に入って制止するのですが、もう、おさまりません。警官も、騒ぎの張本人と思われる男を「文字通り投げとばした」と言うことですし、栈敷にいた当の作曲家の一人は大声で「がらくたどもは、荷物をまとめて出て行け！」と叫んだということです。それが、なんと、最も穏やかで沈静した音楽しか書かなかったウェーベルンであったのは驚きです。ウェーベルンこそ、リズムの一つの要素として「沈黙」を取り入れ、「音と沈黙の弁証法を可能にする方法を探求した最初の音楽家」（ブーレーズ＝フランスの現代作曲家）であったのですから。

### 予言者、国にいれられず

こんな大騒ぎはウィーンでも珍しいことでした。シュトゥッケンシュミットが言うように、当時は「人類が、互いにみなごろしを企てるにいたった最初の全体戦争前夜の世代にあたる」時代であり、従来の安定した「秩序のかたい基盤をゆさぶったり、黙示録的破局の形で、未来像のヴェールをはぎとるような芸術的表現は、すべて、重大な脅威としてうけとられたのは、あやしむにたりない」ということなのでしょう。戦争が確実に近付いて来ていることをみんなが知っていて、その不安をあおる彼らの曲に我慢できなかったのです。しかし、それでもなお、現代音楽の作曲家は、すべからず不安な時代の予言者にならざるを得ないのです。「作曲家は、何か言いたいことがあるから書く」（シェーンベルク）のですから、当然、反社会的な「邪悪なこと」をも発言することがあります。

### 現代音楽の「邪悪さ」について

「音楽の邪悪さ」ということから言えば、これは、「12音音楽」の特権でしょう。その代表作として、ベルクのオペラ『ヴォツェック』（1925年初演）とシェーンベルクの『ワルソー（ワルシャワ）の生残り』（1948年初演）が上げられましょう。特に『ヴォツェック』は、昨年（1985年）が、作曲者の生誕百年・没後五十年の記念の年でもあり、同時にこのオペラの初演後六十年でもありましたので、名古屋でも小沢征爾の指揮で上演されましたから、オペラ好きなあなたもきっとご覧になったことなのでしょう。完全なオペラ上演ではなく演奏会形式であったのは残念でしたが、久しぶりで聴く現代音楽のオペラに感激したものでした。この感激は、「ベルクの音楽の持つ非情でヒステリックで邪悪な音こそが、私たちに苦しめているこの不条理な現代社会の邪悪な姿そのものである」と音楽そのものが告発してくれていることから生まれたものでしょう。ワルシャワのユダヤ人虐殺のときに奇跡的に生残った一人の話を聴いたシェーンベルクも、平凡な一軍曹の悲劇を読んだベルクも、本当に腹を立てていたのです。音楽家である彼らが、この「邪悪な世界」に向かって放った怒りの弾丸がこの音なのです。

## 現代音楽の「まとまりのなさ」について

例えば、ストラビンスキーの音楽のように断片的でまとまりのない現代音楽の性格は、その変り身の早さから来るものです。それは、転調の連続と言っていいもので、音楽が、いま、どこにいて、なにをしているのか、誰にも分かりません。

ウェーベルンはそんな転調について面白い比喻を用いています。（『12音による作曲への道』竹内豊治訳）

私は釘を打ちこもうと隣の部屋へ行きます。そこへ行きながら、いっそ外出しようという考えが浮かび、のんびんだらりと過ごしてから、電車にのり、駅に来て、汽車で出発して、とうとう来たのです—アメリカに！　これが転調であります！

良く分からないワケであります。

「12音」になると、その転調でさえもなくなってしまいます。そのことをバーンスタインはとても上手く説明しています。彼は「12音音楽には調性がないので（＝無調性）、ホーム・ベースも1塁も2塁もなしで野球をするようなものだ」といいます。「それは非常に複雑なものになります、すべり込むための主音という本塁さえもないのですから」。中心になる調性もないので、転調もありません。まとまりのないこと、おびただしいのですが、それだけ自由です。「何かからの自由」ではなく、「何かへの自由」がそこに、すなわち、完成された「12音音楽」にはあります。音楽全体が、ホーム・ベースになったのですから。これこそ、「まとまりのなさ」の積極的な価値です。

「現代音楽」は、結局のところ、あなたの「現実度」（アクチュアリティ）をはかる踏絵であるかもしれません。でも、現代音楽を聴いて、なにか特別な主張を述べなければならぬ必要はことさらありません。

今夕のウェーベルンの音楽のように、沈黙も大切なアクチュアリティの表現であるのですから。